

秀松をガイドして盛岡周辺を歩いた「賢さん」

盛岡高等農林に二人が入学したのが 1915(大 4)年 4 月であり、二人は同級生かつ同寮生だった。賢治は親しい同級生からは「賢さん」と呼ばれていた。その辺の事情を秀松は、次のように回想しています。

「学生時代の賢治は教授や先輩からは宮沢君と呼ばれ私ども親しい友からは、<賢さん>またはグット砕けて、土地なまりで<賢さァ>とも呼ばれていた。私が<賢さん>とはじめてあったのは、大正四年四月である。<賢さん>は盛岡中学から農学第二部(農芸化学)に、私は、宮城農学校から農学第一部(一般農学、農政経済)に入ったのだが、当時の校則で初年生は原則として、寄宿舎生活をせねばならぬようにきめられてあったので、賢さんも私と共に南寮一号室に容れられ六人一家の生活が始められた。」

「入舎して最初の土曜日であったと記憶するが、<賢さん>に案内されて市内見物に出かけた。第一に上田、<田中の地蔵尊>これは石川啄木のゆかりの処、次には賢さんの母校である旧盛岡中学校、特に啄木の歌に出てくる白ペンキもはげかけたバルコニーを、第三には桜山神社と不来方城跡を、ここの展望台から西北遥かに巖鷲山(岩手山)をのぞみ、その詳しい説明をきかされ、雪が消えたら早速登る約束もした。第一日はこれくらいで終了。」(高橋秀松「宮沢賢治の高農時代」『七十七』9月号、昭39年)

賢治と秀松の交友は、学校の授業や寮生活だけではなかった。むしろ週末や、休日を利用して盛岡の市内の見物、「石割桜とその成因の学説、岩山天神山、高松の池」、さらに周辺の山野に足を延ばし、「瑠璃山」に登り「昔採ったあたりで、瑠璃や玉髓を探し当てて、帰ろうとしたら大雷雨！ 峯は危い、大木も危い、谷に降りると大声を発して、一目散に二人で手に手を取り乍ら下山」当時の様子を、秀松は 50 年後に生々しく回想して懐かしんでいます。

花巻出身の賢治ですが、中学は盛岡中学校でした。中学の 10 年先輩には石川啄木がいた。賢治は中学時代の経験を含めて、盛岡生活の先輩として、宮城県の名取から来た秀松に対して、親切に生活のガイダンスをした。秀松も賢治の親切なガイドに従い、友情を深めながら、高農時代のまことに充実した盛岡生活を満喫したのではないか？ 賢治と秀松の友情あふれる生活から賢治の文学が生まれ、賢治精神に裏付けられた秀松の名取市政も誕生したと思います。高農時代の賢治と秀松の交友こそ、強く深い二人の友情だけでなく、その後の二人の人生を決めることになったのです。

